

## 六月心光寺定例聞法会のご案内

＊期 日 平成十四年六月十六日(日曜日)

＊時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より

＊会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏

＊講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

### 心光寺からの便り

日もとつぷり暮れた頃、近くを流れる大分川の橋の上に立つと、見上げる夜空に満天の星がまたたき、それに呼応するように、川の流れに沿って無数の螢ほたるが明滅していました。周囲の水田からは蛙かえるの鳴き声がいっ果てるともなく聞こ

えてきます。この世のものとは思えない幻想的な光景の中で、しばらく時間のたつのも忘れて佇ただずんでいました。

さて、大石先生はよくお話の中で、

「私は自分の人生観や主義、主張を話しているのではありません。私には何の思想も主義、主張もありません。」

と語られることがあ



ります。私は何気なく語られるこのお言葉に、何かとても新鮮なものを感じます。そこに念仏者大石法夫先生の全てが現れていると言っても過言ではないようにさえ思います。

世の中には様々な主義や主張があふれています。自分の主義、主張を持っていないと、世の中に伍ごしていけないような気にさせられます。大石先生の場合を考えても、体が休まる違いじまもなく布教の旅に歩かれるのだから、余程主張されることがあるに違いないと一見すれば思われます。親鸞聖人しんらんしやうにんにしても、『教行信証』という大著作があり、他にも和漢の著述が沢山あります。すると余程膨大な主義主張がその中に盛り込まれているに違いないと錯覚してしまいます。

そういう中で大石先生のこのお言葉に接する時、おやっと思うと同時に、とても新鮮なものをそこに感じるのです。おそらくその言葉によって、私がいつの間にか身につけてきたところの、自分の考えを持たなければならぬという強迫観念きやうはくかんねんから解放されるのだと思います。

ここで私は釈尊しやくそん（お釈迦様のこと）の説かれた毒矢たどの喩たとえを思い出します。釈尊のお弟子に摩羅迦まらかという議論好きの比丘びくがいました。この比丘びくはかねがね釈尊に対してある不満を持っていました。それは、この世界は常住であるか無常であるか、宇宙には果てがあるかないか、靈魂は身体と同じであるか別であるか、人は死後もなお存在するかしないか、このような問題について釈尊は何も説いて下さらないという不満でした。そこである時、今日こそはこのことについて釈尊の考えを聞こうと意気込んで、釈尊に問いかけました。そのとき釈尊が説かれた喩たとが次のような毒矢の喩たとえでした。

人あつて、おそろしい毒矢に射いられたとする。附近のものや友達が集まり、急いで医者を呼んで毒矢をひきぬき、毒の手当てをしようとする。

ところがその時、その人が、「しばらく、矢をぬくことは待ってもらいたい。誰がこの矢を射たのか。それは男か女か。どんな素性すじやうのものか。また弓は何であったか。大弓か小弓か。木の弓か竹の弓か。弦つるは何であったか。藤蔓ふじづるか筋すじか。矢は籐とうか葦よしか、羽根は何か。それらのことが全てわかるまで、矢をぬく

ことは待つてもらいたい。」と言うならば、どうであろうか。

いうまでもなく、それらのことがわかってしまわないうちに、毒が全身にまわって死んでしまうに違いない。この場合、せねばならないことは、まず矢をぬいて毒が全身にまわらないように手当てをすることである。

『新訳仏教聖典』六十七頁)

ここに釈尊の生死の問題に対する非常に明確な態度がよくあらわれています。人々が熱中する主義、主張や、靈魂の有無等のもろもろの哲学的な議論、そういったものについて釈尊は一切触れませんでした。釈尊の第一の関心は、毒矢に射られて死の危機に瀕している人、すなわち生死の苦悩にあえいでいるわれわれをいかにして救うかという、そのことひとつでした。

この喩えは私の聞くべきことが何であるのかということを鮮明にしてくれま  
す。摩羅迦は釈尊のこの説法によつて、主義、主張やもろもろの哲学的問題につ  
いての関心から解放されました。それと同じように私も、先ほどの大石先生のお  
言葉に触れるとき、そこに何かしら解放されるものを感じます。すなわち私は  
欲界（肉体的、物質的世界）・色界（芸術的、文化的世界）・無色界（哲学的、形而上学  
的世界）という三界のもろもろの事柄について様々な好奇心や関心を持っていま  
すが、それらに心を奪われることから解放されるのです。

さて、先の大石先生のお言葉は、言いかえれば「私心なし」ということです。  
これは大石先生のお話の根底にあるものではないかと思えます。これは大石先生  
のお話をお聞きしている時よく感じるのですが、大石先生はつねに藤解先生の  
教えを聞いておられる。それ以外に大石法夫という存在はないということでは  
そういう時私はいつも、天親菩薩が『浄土論』の中で述べられた次の言葉を思い  
出します。

じょうてんむくりん  
常 転 無 垢 輪

これは浄土の菩薩の功德として述べられた言葉です。「無垢輪」とは穢れのな



い清浄な車輪という意味で、仏様の説法のことを喩えています。つまり浄土の菩薩は、自分が説法をするのではなく、仏様が説法されるところの車輪を常に転がしておられるというのです。私は大石先生のお話をお聞きしているとき、しばしばこの『浄土論』の言葉を思い出すのです。

すなわち大石先生は講義の時だけでなく、例えばみんなと一緒にお茶を飲んだり団欒している時でも、そこに仏法を聞こうとする人がいる限り、倦まずたゆまずご本願のお話をされます。その話の内容も調子も、講義の時と全く違いはありません。しかしそれは決してご自身の自説を披露しておられるのではないということです。話しながら、藤解先生が折に触れて語られたお言葉を反芻しておられるのです。それが倦むことなく法を語られる先生の本当の姿なのです。つまり法を語ることがそのまま法を聞くことになっていくのです。それ以外に先生の説法はありません。人に説いているのではないのです。先生ご自身が最も聞かれる人になっておられるのです。

まことに一心帰命の信心とは、そういう「私心なし」の世界であります。信心

をいただくというと、自分の中に何かそういうものをつくり上げていくかのよう  
に錯覚してしまいますが、それは信心をいただいでいく道とはおよそ逆の方向だ  
ということですよ。

親鸞聖人はそのところを『教行信証』の中で、曇鸞大師の次のような言  
葉を引用して明らかにして下さっています。

それ菩薩は仏に帰す。孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動靜己に  
あらず、出沒必ず由あるが如し。

(敬虔な念仏者が師に帰依する様子は、ちょうど親孝行の息子が父母に仕え、  
あるいは忠義の家臣が君に仕える際に、日常の行動全てにおいて、全く私心な  
く、全てを挙げて親や君の意向に従おうとする姿に似ている。)

#### 『教行信証』「行」の巻

これはよきひと(師)のおおせに触れて感動し、私心をはらっておおせと一  
つになっていこうとすることです。そこにおいて始めて、よきひとを動かす本  
願力のはたらきが私の上にも現れるのです。これに対して、私が自分の考えで  
よきひとの言われることをとらえ、理解したとすると、私の方が理解された内  
容より大きいことになって、これではどこまでいっても私心を出ることができ  
ず、従って私が救われることは決してありません。

親鸞聖人は『歎異抄』の中で、

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと  
のおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。

#### 『歎異抄』第二章

とおっしゃっておられます。つまりよきひとのおおせを、着物を着るようにし  
て身に受けていく。私心をはらっていたいでいく。おおせと一つになってい  
く。その外に私の信心はないと、そう親鸞聖人はいわれるのです。

前回心光寺便りの中に書いた「同一の信心」ということも、それを行者の側か  
ら言うとする、「私心のない心」ということになります。「私」があったら、別

の信心になります。「私」がないから、その人の上に「如来よりたまわりたる」同一の信心が現れるのです。

すでに亡くなりましたが、森有正もりありまさという優れた哲学者がおられました。この方はキリスト教のカトリックの敬虔けいけんな信者でしたが、宗教の枠を超えて、信仰の真実の姿という点で、私にとつてとても多くのことを教えて下さった方です。この方が今から三十数年前、ある教会での説教の中で次のようなことを語っておられます。

例えば内村鑑三うちむらかんざう先生、あるいは植村正久うえむらしよききゆう先生と言う先生方の姿を見るときに、私はどうしても一番根源的な信仰というものを思い浮かべざるを得ないのであります。殊ことに内村先生の、すべての教会からは恐れられ迫害され、また国家の側からも理解されずに迫害された、あの深い信仰は、やはりこのアブラハムに現れ、族長に現れ、預言者に現れたあの根源的な信仰の本質と同じように、内村先生の人格のまん中に、内的な促しとして生きていた。それを除いて内村先生の本当の姿というものを想像することはできない、(中略)

イエス・キリストはその姿を一番高い形において示して下さった。(中略) どのような困難がありましたも、私はそこに私どもの生活の本拠を置きまして、そこから出発しまたそこに帰り、……。

『土の器に』二十六頁)

例えば、あのマグダラのマリアでありまして、あるいはアリマタヤのヨセフでありまして、あるいはほんの行きずりの一人にすぎなかったクレネ人シモンでありまして、結局そういう人たちの名前が二〇〇〇年を経た今日までも覚えられている。そこに、あらゆる宗派とか教派としての教会とか観念とかイデオロギーとかというものを離れた、人間の非常に深い真実な姿がひらめいております。(中略) 私どもも自分たちの中にそういう姿の、またそういう光の一片を宿すことによって信仰の生活を送らせていただくことができると、それが私自身の深い願いでございます。

(同二十七頁)

これはもうほとんど親鸞聖人の教えて下さった、「同一の信心」のことを教え  
て下さっていると、そういうふうにははいただいておりまして、折に触れてはこ  
の部分を押読させていただいています。

ここで言われている「信仰」とは、信仰といっても、もう個人が起こす心の状  
態といったものではありません。それは「現れる」ものです。旧約聖書に登場す  
るアブラハムに現れ、族長に現れ、預言者に現れた。そしてイエス・キリストに  
最も鮮明な形で現れた。その同じ「信仰」が内村鑑三先生の人格のまん中に現れ  
ている。それ以外に内村先生の本当の姿はないと、そう森有正先生はみられたの  
です。

そして森先生は、そこに生活の本拠を置いて、そこから出発し、またそこに帰  
りたい。それが自分の深い願いであると語られます。あるいは信仰に生きた先輩  
方の姿を思い起して、そういう姿の一片、そういう光の一片を宿す。そういう信  
仰の生活を全うしたい。それが自分の深い願いであると語られます。

ここに森先生が語られる信仰というのを、そっくり一心帰命の信心に置き換え  
ていただくことができると私は思っています。すなわち一心帰命の信心は、私と  
いう個人が起こすものではなく、かつてインドの天親菩薩てんじんぼさつに現れ、中国の善導ぜんどう  
大師だいしに現れ、そして法然上人ほうねんしょうにんに現れたものです。それはさかのばれば、すでに



釈尊が『大無量寿経』の中  
で、世自在王せじざいおうおうに帰依する  
法蔵菩薩ほうぞうぼさつの姿として表わし  
て下さった信心です。それ  
はとりもなおさず、そうい  
うかたちで釈尊ご自身の胸  
の中に現れた信心です。そ  
してその信心を、親鸞も法  
然上人のおおせをかぶると  
いうかたちでいただいでい  
かれたわけです。

その信心が、今まぎれもなく大石先生の上に現れている。そう私はいただいています。藤解先生のおおせを虚心に語られる大石先生の上に、藤解先生のお会いされた本願が生き生きと現れているのを感じることができません。大石先生はご自身が出会われたその本願を、知識や話術という粉飾ふんしやくを通さず、生地きじのままの姿で、愚直ぐちよくに、訥々とつとつと語られます。私は、先生の聴き取りにくい語り口までもが、先生のお会いされた本願を、出会ったままに、虚心に、力を尽くして語られる姿と映ります。そして先生のお会いされたその本願に、今私がかたじけなくも出会わせてもらっているのだと思います。

私も先生の教えを虚心にかぶって、先生の上に現れた本願をいただいでいきたい。願わくば私も、念仏の信心を生き抜かれた有名、無名の無数の先達者方の光の一片をこの身に宿すことよって、念仏の信心の道を一步また一步と歩ませていただきたい。それが私自身の深い願いであります。

南無阿弥陀仏

文隆拝

平成十四年六月十一日

撰 取 山 心 光 寺